朱子語類讀書法篇譯注 (四)

興膳　宏　京都大學
木津祐子　同志社女子大學
齋藤希史　京都大學

21　學者讀書、須要斂身正坐、緩視微吟、虛心涵泳、切己省一作體察。又云、讀一句書、須體察這一句、我將來甚處用得。又云、文字是底固當看、不是底也當看、精底固當看、粗底也當看。震。

「學ぶ者が讀書するときには、居ずまいを正してきちんと坐り、ゆったりながめながら靜かに吟じ、心を空っぽにして深く味わい、わが身に引きつけて省察せねばならない。」またおっしゃった、「書の一句を讀む時、その一句を自分がどのような局面で用いるかを、わが身のこととして省察せねばならない。」またいわれた、「文章は、そうだと思うものはもちろん讀まねばならないが、そうとは思えないものも讀まねばならない。精密なものは當然讀まねばならないが、大ざっぱなものも讀まねばならない。」鍾震。

(校勘)　朝鮮古活字本　這一句→此一句
朝鮮古寫本　缺。但し、「讀書法上」の第一條に、「過聞先生敎人讀書之法有曰、斂身正坐、緩視微吟、虛心涵泳、切己省察」と見える。

(注)　本條前段に見られる「虛心涵泳」「切己省(體)察」は、「斂身正坐」「緩視微吟」という身體狀況と對比的に述べられるが、讀書における重要な心構えとして朱子の書齋にこの四句が掲げられていたことが、四庫本『朱子讀書法』一「綱領」に記される。「先生書於讀書之所曰、斂身正坐、緩視微吟、虛心涵泳、切己體察。寬着期限、緊着課程。研精覃思、以究其所難知。平心易氣、以聽其自得。」また。「虛心涵泳」と「切己體察」は『朱子讀書法』の類目名ともなっていることを注意しておきたい。

「緩視」は、そのままの形での用例は見當たらないが、「緩」自體は心が落ちついた狀態をいう語であることを踏まえ、「穩やかにながめる」意に譯出した。「緩緩」という例を『語類』の中から擧げておく。「且放下此一段、緩緩尋思、自有超然見到處。」(「大學二　經下」一五・303～4)

底本は「省察」を、「體察」と作るテキストのあることを注する。本條には「省察」「體察」の双方が見られるが、両者はともに「體認省察」の義を代表する語であって、意味に大きな差はない。例えば、學問の進め方を問われての朱子の以下の答えは、「體認省察」の意をよく表わしている。「不過是切己、便的當。此事自有大綱、亦有節目。常存大綱在我、至於節目之間、無非此理。體認省察、一毫不可放過。」(「總論爲學之方」八・140)。なお、「涵泳」の語については、上篇5條の注を參照されたい。

本條の「讀一句書〳〵甚處用得」と同じ言が、『朱子讀書法』巻二「虛心涵泳」に見える。

本條以下數條にわたっては、「虛心」「切己」の二項目について繰り返し説かれる。

(記錄者) 鍾震 字は春伯、宗一先生と稱す。潭州湘潭縣の人。『師事年攷續』二八四。

22 讀書須是虛心切己。虛心、方能得聖賢意。切己、則聖賢之言不爲虛說。

讀書するには、心を虛しくして己れに引きつけること。心を虛しくしてこそ聖賢の考えが分かるようになるし、己れに引きつければ、聖賢のことばも空論とはならない。

(記錄者名を缺く)

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

23 看文字須是虛心。莫先立己意、少刻多錯了。又曰、虛心切己。虛心則見道理明。切己、自然體認得出。學。

「文章を讀むには心を虛しくせねばならない。決して先に自分の考えを立ててはいけない。それではすぐに間違いに陷る。」またいわれた。「心を虛しくして己れに引きつけること。心を虛しくすれば道理がはっきりと見え、己れに引きつければ、自然に身をもって理解できるようになる。」學

(校勘) 朝鮮古活字本・朝鮮古寫本 多錯了→都錯了

(注) 「少刻」は、しばらくしての意で、上篇31條に見えた「少間」に同じ。

前條と同じく、「虛心」「切己」の重要性を、それぞれの異なる效用を對比して述べる。すなわち、「虛心」によって道理に近づき、「切己」によってそれを具體的に把握することができる、と論ずる。

(記錄者) 不明。『師事年攷』『朱子門人』ともに未載。『師事年攷』一六四には蔡慇なる人物が記されるが、本條の記錄者かどうかは確定しがたい。

24 聖人言語、皆天理自然、本坦易明白在那裏。只被人不

虛心去看、只管外面捉摸。及看不得、便將自己身上一般意思說出、把做聖人意思。淳。

聖人のことばは、すべて天理自然で、そこにあるままに本來わかりやすく明らかなものだ。ただ、人は虛心にそれを見ようとせず、よそ事ばかりを探ろうとする。そして、讀んでも分からなければ、自分程度の考えを述べ立てて、聖人の考えとしてしまうのだ。陳淳

（校勘）　朝鮮古寫本　自己身上→自己上　記錄者名缺

（注）　「坦易明白」は、すっぱりと明らかで裏のないことをいう。「學者議論工夫、當因其人而示以用工之實、不必費辭。使人知所適從、以入於坦易明白之域、可也」（「總論爲學之方」八・146）「坦然明白」も同樣で、「知至則道理坦然明白、安而行之」（「大學二　經下」一五・302）、「聖人之言坦易明白、因言以明道、正欲使天下後世由此求之」（「論文上」一三九・3318）などのごとく、聖人の言や道理についていうことも多い。

「外面」は、ここでは單に外側をいうのではなく、聖人の教えの本質からそれたものを指す。同趣旨の發言としては、「總論爲學之方」（八・132）の「學問是自家合做底。不知學問、則是欠闕了自家底。知學問、則方無所欠闕。今人把學問來做外面添底事看了」や、「訓門人四」（一一六・2805）の、「看外面有甚事、我也不管、只恁一心在書上、方謂之善讀書」など、しばしば見出される。また、後出の42條も參照のこと。

「捉摸」は、探ることをいう口語。「凡人便是生知之資、也須下困學、勉行底工夫、方得、蓋道理縝密、去那裏捉摸。若不下工夫、如何會了得。」（「總論爲學之方」八・135）

「把做」は、「～として見なす、取り扱う」の意。「把作」と作るものも同じ。「把～作～」というかたちに分析することができるが、『語類』には兩者が併存する。例えば、「人多作吾聖人道德。太史公智識卑下、便把這處作非細看、便把作大學中庸看了」（「老氏　老莊列子」一二五・2992）は、兩者が同時にあらわれる例である。

本條から32條までは、重點的に「虛心」の效用を說く。

25　聖賢言語、當虛心看、不可先自立說去撐拄、便喎斜了。不讀書者、固不足論、讀書者、病又如此。淳。

聖賢のことばは、心を虛しくして讀むこと。先に自分の說を立ててそれにしがみついてはいけない。それではゆがんでしまう。書物を讀まない者は、もとよりお話にならないが、書物を讀む者にも、このような缺點がある。陳淳

（注）　「撐（＝撐）拄」は、本來「突っ張る、支える」の意であるが、ここでは「固執する、こだわる」意となる。「舜弼爲學、自來不切己體認、却只是尋得三兩字來撐拄、亦只說得箇皮殼子。」（「訓門人五」一一七・2810）

「喎斜」は、「歪斜」に同じく、ゆがむ意。「如破斧詩、恁地說也不錯、只是不好。說得一角不落正腔窠、喎斜了。」（「訓門人五」一一七・2821）

本條と同じ言は、『朱子讀書法』卷二「虛心涵泳」に見える。

26 凡看書、須虛心看、不要先立說。看一段有下落了、然後又看一段。須如人受詞訟、聽其說盡、然後方可決斷。泳。

およそ書物を讀むときには、心を虛しくすること。先に說を立ててはいけない。一段を讀んで納得してから、次の一段に進むのだ。例えば訴訟を受けるときに、言い分をすっかり言わせてから、判決を下すことができるようなものだ。湯泳

（注）「下落」は、上篇第64條・76條、また下篇8條に既出の「着落」に同じく、「落ちつくところ」の意。特に下篇8條の「逐句逐字各有着落、方始好商量」と、『朱子讀書法』三「循序漸進」に「答宋容之書」を引いての「先要虛心平氣、熟讀精思、令一字一語皆有下落、諸家注解一一貫通、然後可以較其是非、以求聖賢立言之本意」とを比較すれば、その同義性は明らかである。

27 看前人文字、未得其意、便容易立說、殊害事。蓋既不得正理、又枉費心力。不若虛心靜看、卽涵養・究索之功、一舉而兩得之也。時擧。

先人の書物を讀むとき、その言わんとするところがまだ分からないうちに、氣易く自說を立ててしまうのは、極めてよくない。正しい理も分からない上に、精力も浪費してしまうからだ。心を虛しくしてじっくり讀めば、「涵泳（味わう）」と「究索（追求する）」の働きを一度に二つながらものにすることができる。これがいちばんだ。潘時擧

（校勘）朝鮮古寫本 缺

（注）「枉費」は、下篇第15條に既出。

「涵泳」は、前出第21條に既出。「涵養」とほぼ同じ意味の語である。

「究索」は、道理を追求することをいう。「書用你自去讀、道理用你自去究索」（「力行」一三・223）など。

朱子は、本條で述べる「涵泳」（「涵養」）と「究索」（「窮究」「窮理」など）を、讀書の上で不可缺な車の兩輪と考えていた。このような考え方は左に擧げるように、『語類』では主に卷九「論知行」で重點的に表明される。

涵養中自有窮理工夫、窮其所養之理。窮理中自有涵養工夫、養其所窮之理、兩項都不相理。（「論知行」九・149）

擇之問、且涵養去、久之自明。曰、亦須窮理。涵養・窮索、

二者不可廢一、如車兩輪、如鳥兩翼。（「論知行」九・150）

この「涵養」は、「程子謂、涵養須用敬、進學則在致知」とあるように、密接に結びつく概念である「敬」で表現されることもある。

學者工夫、唯在居敬、窮理二事。此二事互相發。……譬如人之兩足、左足行、則右足止、右足行、則左足止。（「論知行」九・150）

主敬・窮理雖二端、其實一本。（「論知行」九・150）

後出44條には、「涵泳」を「玩索」と言い換えてはいるが、やはり同趣旨の言が記録されているので、參照されたい。

本條と同じ言は、『朱子讀書法』卷二「虛心涵泳」に見える。

28　大抵義理、須是且虛心隨他本文正意看。必大。

およそ義理は、まずは心を虛しくして本文の趣意に沿って讀むことだ。吳必大

（校勘）　朝鮮古寫本　缺

（注）　『朱子讀書法』卷四「虛心涵泳」に同じ言が記録される。

（記録者）　吳必大　字は伯豐。興國軍の人。『師事年攷』二〇一。同『續』三〇二。

29　讀書遇難處、且須虛心搜討意思。有時有思繹底事、却去無思量處得。敬仲。

讀書して難しいところに出くわせば、しばらくは心を虛しくしてその意味を探ること。始終思索していれば、思いもよらぬところでわかるものだ。游敬仲

（校勘）　朝鮮古寫本　本條の後に約一行の空白があり、次條の「將來～虛心觀之」が同一條に記される。

（注）　「時有思繹」は、程伊川の「時復思繹、浹洽於中、則說矣」という『論語』學而篇「學而時習之、亦不說乎」に對する注語による。この語は、朱子の『論語章句』や「論語二　學而篇上」（二〇・448～）にもしばしば引かれる。また上篇5條の注を參照されたい。

本條と同じ言は、『朱子讀書法』卷二「虛心涵泳」に見える。

30　問、如先生所言、推求經義、將來到底還別有見處否。曰、若說如釋氏之言有他心通、則無也。但只見得合如此爾。再問、所說「尋求義理、仍須虛心觀之」、不知如何是虛心。曰、須退一步思量。次日、又問退一步思量之旨。曰、從來不曾如此做工夫、後亦是難說。今人觀書、先自立了意後方觀、盡率古人語言入做自家意思中來。如此、只是推廣得自家意思、如何見得古人意思。須得退步者、不要自作意思、只虛此心將古人語言放前面、看他意思倒殺向何處去。如此

玩心、方可得古人意、有長進處。且如孟子說詩、要「以意逆志、是爲得之」。逆者、等待之謂也。如前途等待一人、未來時且須耐心等待、將來自有來時候。他未來、其心急切、又要進前尋求、却不是「以意逆志」、是以意捉志也。如此、只是牽率古人言語、入做自家意中來、終無進益。大雅。

問、「先生のおっしゃるように經義を推し求めていくと、いずれ他に見えてくるものが有るのでしょうか」。答、「もしも佛教でいう『他心通』が有るかというのなら、それはない。ただ見えるように見えるということだ」。さらに問うて、「『義理を追求するにも、虛心に考えなくてはならない』とおっしゃいますが、いったいどのようなことが虛心なのですか」というと、「一歩下がって考えることだ」と答えられた。次の日、また一歩下がって考えることの意味を問うたところ、「今までそのような努力をしたことがないのなら、今さら說明はしにくいね。いまの人は書物を讀むのに、まず思惑を立ててから讀むので、古人のことばをみな自分の考えの中に引き込もうとする。それでは、自分の考えを推し廣げるばかりで、どうして古人の考えが理解できよう。一歩下がるべきだ、というのは、自分勝手に考えをでっちあげるのではなく、ただ心というものを虛しくして、古人のことばを前に置き、その考えがどこにひたすら向かおうとするのかを見るのだ。このように一心に考えてこそ、古人の心がわかり、大きく進歩することができるのだ。例えば、孟子は、『詩』を說くのに「意をもって志を逆う。是れ、之を得たりと爲す」ようにせねばならぬという。逆は待つと言うことだ。誰かを待って、まだ來ないうちは、我慢して待っていれば、いずれやってくるものだ。まだ來ないうちに、心が焦って、自分から探しに行こうとするなら、それは「意をもって志を逆」えるのではなく、「意をもって志を捉え」ているのだ。これでは、古人のことばを引っぱってきて自分の考えにはめ込もうとするだけで、結局何にもならない。余大雅

（校勘）朝鮮古活字本　後亦是→後亦自
朝鮮古寫本　「問、如先生所言、推求經義」「不知」「次日」
缺　後亦是→後亦自　牽率→二行注のような體裁で書かれる。
また、「將來〜虛心觀之」は前29條と同一條に記され、「如何是虛心」以下が獨立した一條として記錄される。

（注）「他心通」は六神通の一つで、衆生の心中を洞察する神通力を指す。他心智ともいう。『無量壽經』上（大正藏一二―二六八a）に、「設我得佛、國中人天、不得見他心智、下至不知百千億那由他諸佛國中衆生心念者、不取正覺」と見える。

「盡率」の「率」は、末尾に見える「牽率」と同じく「引っ張る」の意。「盡」は強めの副詞。

「殺向」は、介詞の「向」に程度の激しいことを表わす副詞「殺」がついたもの。ここでは「ひたすら向かう」と譯した。

「玩心」は、心を一つ所に集中させることをいうが、早くは『漢書』嚴助傳に「玩心神明、秉執聖道」と用例が見える。

「以意逆志、是爲得之」は、『孟子』萬章篇上「故說詩者、不以文害辭、不以辭害志。以意逆志、是爲得之」からの引用。この『孟子』の語を、朱子は讀書法を論ず際にしばしば持ち出す。幾つか例を擧げておく。

以意逆志、此句最好。逆是前去追迎之之意、蓋是將自家意思去前面等候詩人之志來。又曰、謂如等人來相似。今日等不來、明日又等、須是等得來、方自然相合。不似而今人、便將意去捉志也。（「孟子八　萬章上」五八・1359）

黃仁叔問、以意逆志。曰、此是教人讀書之法。自家虛心在這裏、看他書道理如何來、自家便迎接將來。而今人讀書、都是去捉他、不是逆志。（同上）

某嘗見人云、大凡心不公底人、讀書不得。今看來、是如此。如解說聖經、一向都不有自家身己、全然虛心、只把他道理自看其是非。恁地看文字、猶更自有牽於舊習、失點檢處。全然把一己私意去看聖賢之書、如何看得出。賀孫。

わたしはかつてある人がこう言うのを聞いたことがある。「およそ心が公でない人は、書物を讀んでもわからない」と。今考えても、その通りだ。聖人の書を解釋するには、とにかく自分自身を持たずに、心をすべて虛しくして、聖人の道理をその是非の通りに見ることだ。このように文章を讀んでいても、やはり古くからのやり方におのずと引きずられて、確かめるべきところを見逃してしまう。完全に一私意で聖賢の書物を讀んでいて、どうして理解できようか。葉賀孫

（校勘）朝鮮古寫本　缺

（注）「一向」は、「一味」に同じく、「ひたすら」の意。

「點檢」は上篇第96條に既出。

「舊習」は、古くからなずんだやり方を言う。「人若要洗刷舊習都淨了、却去理會此道理者、無是理。只是收放心、把持在這裏、便須有箇眞心發見、從此便去窮理」（「持守」一二・202）のような用例が見える。

32　或問、看文字爲衆說雜亂、如何。曰、且要虛心、逐一說看去。看得一說、却又看一說。看來看去、是非長短、皆自分明。譬如人欲知一箇人是好人、是惡人、且隨他去看。隨來隨去、見他言語動作、便自知他好惡。又曰、只要虛心。又云、濯去舊聞、以來新見。

ある人が尋ねた、「文章を讀んでいて、諸說に惑わされてしまったらどうしましょう。」答えておっしゃるには、「まず心を虛しくして、一つの說ごとに讀んでいくのだ。一つわかれば次の一つを讀む。何度も繰り返し讀んでいけば、是非や優劣がすべて自然とはっきりしてくる。例えばある人がよい人なのか惡い人なのかを知りたければ、まず彼につき從って觀察するのだ。ずっとつき從って彼の言動を見ておれば、おのずといい人か惡い人かはわかってくる。」またいわれた、「とにかく心を虛しくするのだ」と。またおっしゃった、「古い知識を洗い流し、新たな理解を得るようにせよ。」（記錄者名を缺く）

（校勘）朝鮮古寫本　缺

（注）「濯去舊聞、以來新見」は、張載の「義理有疑、則濯去舊見、以來新意」（『經學理窟』學大原下、また『近思錄』格物窮理など）にもとづいた言。讀書法下の第73條（一一・186）にも、先入觀にとらわれず讀書することの大切さを說く中で、「橫渠云、濯去舊見、以來新意。此說甚當。若不濯去舊見、何處得新意來」と述べる。「學三　論知行」（九・155）等にもこのことばが引かれる。

33　觀書、當平心以觀之。大抵看書不可穿鑿、看從分明處、不可尋從隱僻處去。聖賢之言、多是與人說話。若是嶢崎、却教當時人如何曉。節。

書物を讀むには、心靜かに讀むこと。なべて書物を讀むときには、あれこれほじくってはいけない。はっきりしたところから讀むべきで、わかりにくいところから探って行ってはいけない。聖賢のことばは、たいてい人に語りかけたものだ。もしややこしければ、當時の人にどうしてわからせることができよう。甘節

（注）「平心」は、心を靜めることをいう。讀書法上52條に既出。

「嶢崎」は、くねくね曲がっていることをいう雙聲の語。「蹺蹊」「蹻蹊」「蹻奇」「蹻欹」などに作るのも同じ。讀書法下の98條（一一・188）に、「讀書只就一直道理看、剖析自分曉、

不必去偏曲處看。易有箇陰陽、詩有箇邪正、書有箇治亂、皆是一直路逕、可見別無嶢崎」とあるものや、「訓門人三」（一一五・2778）に、朱子に入門したばかりの徐寓に、學問の進め方を簡潔に説く場面での、「此事本無嶢崎、只讀聖賢書、精心細求、當自得之」などの例が擧げられる。

本條以降では、心を靜め、ゆったりとした精神狀態で讀書することの重要性を集中的に論ずる。

34　觀書、須靜著心、寬著意思、沈潛反覆、將久自會曉得去。儒用。

書物を讀むには、まず心を平靜に保ち、氣持ちをゆったりとさせ、深く味わい反芻すれば、そのうちに、おのずからわかっていく。李儒用

（校勘）朝鮮古寫本　讀書法上所收

（注）「沈潛」は、上篇64條に既出。また、上篇11條に見える「深沈」も、同趣旨で用いられる語の一つである。

「反覆」は、上篇34條に既出。同條では、「反覆玩味」という形で用いられるが、本條は、「反覆」の二字でも「反芻し味わう」意味で用い得ることがわかる好例である。

「靜著心、寬著意思」の「著」は、現代語の持續態に通ずる用法であるが、これは、宋元代に顯著に發展した用法で、ここでの例はそれを反映する。

また、本條と同じ言が『朱子讀書法』卷二「虛心涵泳」に見える。

（記錄者）李儒用　字は仲秉、練溪と號する。『師事年攷』一六八による。

35　放寬心、以他說看他說。以物觀物、無以己觀物。道夫。

心をゆったりと保ち、その人のことばによってその人のことばを讀むのだ。物によって物を見るのであって、己れによって物を見るのではない。楊道夫

（校勘）朝鮮古寫本　讀書法上所收

（注）「放寬心」は、上篇30條に「放寬着心」の形で既出。

36　以書觀書、以物觀物、不可先立己見。

書物によって書物を讀み、物によって物を見るのであって、先に己れの考えを立ててはいけない。（記錄者名を缺く）

（校勘）朝鮮古寫本　缺

37　讀書、須要切己體驗、不可只作文字看、又不可助長。

書を讀むには、自分に引きつけて體得すべきであって、單に書かれたものとして見るのではいけないし、勝手に手方。

を加えてもいけない。楊方

（校勘）朝鮮古寫本　讀書法上所收

（注）「體驗」は、身をもって理解すること。上篇第35條の注を參照のこと。

「助長」は、現代中國語では良いことの發展を助ける意にも用いられるが、本條は、『孟子』公孫丑上の、苗を引っ張って早く成長させようとして結局枯らしてしまった宋人の寓話での用法と同じく、淺はかな人爲の手を加える意味で用いている。

（記錄者）楊方　字子直。長汀縣の人。『師事年攷續』三〇六。

38　學者當以聖賢之言反求諸身、一一體察。須是曉然無疑、積日既久、當自有見。但恐用意不精、或貪多務廣、或得少爲足、則無由明耳。祖道。

學ぶ者は、聖賢のことばをわが身のこととしてふりかえり、一つ一つ體得せねばならない。はっきりと疑いのない狀態で、日かずを重ねれば、必ず見えてくるものがある。しかし、心づかいが雜であったり、多く廣くと欲張ったり、ちょっとわかっただけで滿足してしまうようでは、理解できるわけがない。曾祖道

（校勘）朝鮮古寫本　讀書法上所收

（注）「反求諸身」は、『孟子』公孫丑上や同離婁上の「反求諸己」、『中庸』第十四章「射者似乎君子、失諸正鵠、反求諸其身」による語で、「切己」の言い替えとして用いられる。つまり、「反求諸身、一一體察」は、これまでも繰り返し述べられ、朱子の書齋に捨げられた標語の一つである「切己體察」のことと理解できる。

また、關連する內容の例として、『朱子讀書法』四「虛心涵泳」の條を擧げておく。「取孟子・子思之言、虛心平看、且勿遽增他說、只以訓詁字義、隨句略解、然後反求諸身、以驗其本體之實爲如何、則其是非可以立制。」

39　讀書、不可只專就紙上求理義、須反來就自家身上以手自指。推究。秦漢以後無人說到此、亦只是一向去書册上求、不就自家身上理會。自家見未到、聖人先說在那裏。自家只借他言語來就身上推究、始得。淳。

書物を讀むのに、紙の上だけで義理を求めるのではいけない。必ずこの身でもって――といって自分を指さす――追求せねばならない。秦漢以後、誰もそれに言及しなかったし、ひたすら書物の上に義理を求めるばかりで、自分の身に引きつけて取り組んではこなかった。自分のわかっていないことを、聖賢が先にそこで言っているのであり、そのことばを借りてわが身に引きつけ追求してこそよい。陳淳

（校勘）朝鮮古寫本　讀書法上所收　始得→如得

（注）「推究」は、推しはかりきわめるの意。『語類』では、畢竟古人推究事物、似亦不甚子細。（「理氣下　天地下」二・20）

今人皆無此等禮數可以講習、只靠先聖遺經自去推究、所以要人格物主敬、便將此心去體會古人道理、循而行之。（「大學二　經下」一五・287）

などの用例が見られる。

本條では、「以手自指」という語で朱子の動作を説明する、いわばト書きのような役割の細注が見える。『語類』に付される細注には、異本を示すもの、内容の概要を示すもの、關連する他者の記錄を資料として付すものがその大半であるが、まれに本條のような例も見える。

本條と同じ言が『朱子讀書法』卷二「虛心涵泳」に見える。

40　今人讀書、多不就切己上體察、但於紙上看、文義上說得去便了。如此、濟得甚事。「何必讀書、然後爲學」子曰、「是故惡夫佞者」。古人亦須讀書始得。但古人讀書、將以求道。不然、讀作何用。今人不去這上理會道理、皆以涉獵該博爲能、所以有道學俗學之別。因提案上藥囊起、曰、如合藥、便要治病、終不成合在此看。如此、於病何補。文字浩瀚、難看、亦難記。將已曉得底體在身上、却是自家易曉易做底事。解經已是不得已、若只就注解上說、將來何濟。如畫那人一般、畫底却識那人。別人不識、須因這畫去求那人、始得。今便以畫喚做那人、不得。寓。

近頃の人は書物を讀んでも、たいていは己れに引きつけて體得しようとせず、文字面で讀み、文意が通ずればそれでよしとしてしまう。こんなことで何になろう。「どうして書物を讀むことだけが學問ということになるのでしょうか」という問いに孔子は、「だから口のうまい者を憎むのだ」と言われた。古人もまた讀書してこそよかったのだ。しかし古人の讀書は道を求めるためのものだった。でなければ、讀書して何になろう。今の人は、そんな風に道理に取り組もうとせず、何でもあれこれと廣く知るのが良いと考えている。道學と俗學との違いはここにある。そこで机の上の藥袋を取り上げていわれるには、「たとえば藥を調合するのは病を治すためで、まさか調合してそのまま見ていろ、というわけではあるまい。それでは、病氣には何のききめもない。文章は膨大に存在し、讀むのも大變なら覺

えるのも大變だ。すでにわかったことから身につけていけば、自分でも分かりやすいしやりやすくなる。經典を解釋すること自體、すでにやむを得ないことなのに、もしも注釋についてのみ說くのなら、一體何になろう。たとえば、似顏繪を描くようなもので、描いた人は相手を知っていても、他人は知らないから、その繪を手がかりにその人を搜しに行くようであってこそ意味があるのだ。その繪を本人と見なすのではいけない。」徐寓

（校勘）朝鮮古寫本　讀書法上所收「是故惡夫佞者」以下で葉が改まりそのまま別條に連續しているが、影印本作製の際の亂丁であるのかどうかは不明。

（注）「是故惡夫佞者」という孔子の語は、『論語』先進篇の「子路曰、有民人焉、有社稷焉、何必讀書、然後爲學。子曰、是故惡夫佞者」による。

「該博」は物知りであることをいうが、このように、物知りであることを重視しない朱子の態度は、隨所で表明される。一例を擧げると、「中庸二　第十八章」（六三・1555）で、左傳の禮に關する記述に間違いが多いと述べた後の、「某嘗言左氏不是儒者、只是箇曉事該博、會做文章之人。若公穀二子却是箇不曉事底儒者、故其說道理及禮制處不甚差、下得語恁地鄭重」という發言が、「曉事該博」への朱子の評價がどのようであったかをよく物語っている。

「終不成」は、まさかしではあるまいという意の「不成」の前に强めの副詞「終」が加わったもの。「大學一　經上」（一四・279）に「知止、如人之射、必欲中的、終不成要射做東去、又要射做西去」という用例が見える。「不成」に關しては、讀書法上第4條の注を參照。

「讀書法下」の104條以降には、注解についての專論が見えるが、そこで「解經」は、「讀書法下」（一一・193）に「解經謂之解者、只要解釋出來。將聖賢之語解開了、庶易讀」とあるように、經を理解する助けに過ぎない、とされる。そして本條と同樣、文義から離れ注解の方を第一義とする見方を朱子は批判する。例えば、「經之有解、所以通經。經既通、自無事於解、借經以通乎理耳。理得、則無俟乎經」（「讀書法下」192條・109）や「讀書、須從文義上尋、次則看注解。今人却於文義外尋索」（「讀書法下」193條・115）など。

「喚做～」は、～と呼びなす意。「性理二　性情心意等名義」（五・82）の「性卽理也。在心喚做性、在事喚做理」という例がわかりやすい。

本條では「俗學」と「道學」が對比的に述べられる。「俗學」が任官のための受驗勉强など世俗の學問を言うと考えられるのに對して、「道學」は道理を追究する眞の學問を指し、「聖人之學」としてやはり「俗學」と對立させる箇所も見える。例えば、

「聖人之學與俗學不同、亦只爭這些子。聖賢教人讀書、只要知所以爲學之道。俗學讀書、便只是讀書、更不理會爲學之道是如何」（「論語二　學而篇上」二〇・447）など。

また、本條のように讀書を藥に喩える例は『語類』には頻繁に見られ、既出のものでは、上篇6條や23條にも見える。

41　或問讀書工夫。曰、這事如今似難說。如世上一等人說道不須就書册上理會、此固是不得。然一向只就書册上理會、不曾體認着自家身己、也不濟事。如說仁義禮智、曾認得自家如何是仁、自家如何是義、如何是禮、如何是智須是着身己體認得。如讀「學而時習之」、自家曾如何學、自家曾如何習。『不亦說乎』、曾見得如何是說。須恁地認、始得。若只逐段解過去、解得了便休、也不濟事。如世上一等說話、謂不消得讀書、不消理會、別自有箇覺處、有箇悟處、這箇是不得。若只恁地讀書、只恁地理會、又何益。賀孫。

ある人が讀書の努力について尋ねると、いわれた。「このことは、今の時世ではどうも說明しにくいね。世間のある人たちのように、書物の上で取り組まなくてもよい、などという向きもあるが、これはもちろんあやまりだ。といってひたすら書物の上で取り組むばかりで、自分に結びつけて體得しようとしないのでは、やはり何にもならない。仁義禮智を語るにも、自分はいかにして仁たるか、いかにして義たるか、いかにして禮たるか、いかにして智たるかを、すべてわが身に引きつけて體得せねばならない。『學んで時に之を習う』の條を讀むには、自分はこれまでどのように學び、どのように習ってきたのか、『亦た說ばしからずや』では、どのように『說び』を經驗してきたか、といったふうに考えてこそよい。ただ段を逐って解釋していって、わかったらそれでおしまいというのでは、何にもならない。世間には、讀書する必要などないし、取り組む必要もない、はたと氣づき悟るところは他にあるもんだ、という考え方があるが、それではだめだ。そんな風に讀書して、そんな風に取り組んでいっても、一體何になるというのか。」葉賀孫

（校勘）朝鮮古寫本　讀書法上所收　有箇覺處、有箇悟處→有个覺處、有个悟處　這箇→這固
明刊本　覺處→覺悟處

（注）「不消」は、「不用」に同じく、〜する必要はないの意。

「別自有箇覺處、有箇悟處、這箇是不得」は、先の第30條で見えた、「若說如釋氏之言有他心通、則無也」と同じく、讀書をせずに悟りは別にあるのだ、と考えるあり方を否定する。なお、この「別自有～」という句法は、「別有～」を強めた言い方で、意味の主體は「別」にある。『語類』にしばしば見られる「本自～」「獨自～」と同様の用法と考えてよい。

なお、ここで引かれる『論語』學而篇冒頭の語についての專論は卷二〇「論語二」に見える。

42　學須做自家底看、便見切己。今人讀書、只要科擧用、已及第、則爲雜文用、其高者、則爲古文用、皆做外面看。淳。

學問は、自分のこととして考えてこそ切實なものとなる。いまの人が讀書するのは、ひたすら科擧のためだし、及第したとなると雜文を作るのに用い、いいところが古文を作るためでは、どれもよそ見ばかりということだ。陳淳

（校勘）朝鮮古寫本　讀書法上所收

明刊本　古文→古人

（注）「做外面看」は、よそ事として見なすという意味。「外面」については、前出24條の注を參照。

及第した後の「雜文」とは、公的事務文などを指すと思われる。具體的には、『朱子讀書法』二「虛心涵泳」に「言科擧時文之弊、後生纔把書起來讀、便先要討新奇意思、準擬作時文用、下梢弄得熟了。到做官、或立朝、雖於朝廷大典禮、也只胡亂捻合出來用、不知被理會得底、一拶則百雜碎矣」とあるように、官についた後で作成する儀式の際の公式文書などを指すのであろう。なお、『朱子讀書法』のこの記述は、上篇97條に該當するが、そこでは「纔討得新奇、便準擬作時文使、下梢弄得熟、只是這箇將來使。雖是朝廷甚麼大典禮、也胡亂信手捻合出來使、不知一撞百碎」となっている。

43　讀書之法、有大本大原處、有大綱大目處、又有逐事上理會處、又其次則解釋文義。雉。

讀書の方法としては、まず大本大原のところがあり、大綱大目のところがあり、さらにことがらごとに取り組むところがあって、さてそれから文義を解釋するのだ。吳雉

（注）「大本大原」は、おおもと。「大本原」「大根本」「大原本」なども、すべて同じ。ここで論じられるような、讀書は大きいところから小さいところへ段階的に攻めるもの、という考えは、たとえば、「總論爲學之方」（八・131～）の「學須先理會那大底。理會得大底了、將來那裏面小底自然通透。今人却是理會那大底不得、只去搜尋裏面小小節目」など、隨所に記錄される。「總論爲學之方」（八・144）の「大本不立、小規不正」

や、「論治道」（一〇八・2678）の、「天下事有大根本、有小根本。正君心是大本」、また「天下事自有箇大根本處、每事又各自有箇緊要處」（同上）、なども同じである。

「大綱大目」は、大命題、大綱目。「總論爲學之方」に、「或問、爲學如何做工夫。曰、不過是切己、便的當。此事自有大綱、亦有節目。常存大綱在我、至於節目之間、無非此理。體認省察、一毫不可放過。理明學至、件件是自家物事、然亦須各有倫序」（八・140）とある。ここからも判るとおり、「綱目」は、讀書法上第13條にも見えた「節目」という概念の上位にあたる。次もその一例。

「一代帝紀、更逐件大事立箇綱目、其間節目疏之於下、恐可記得。」（「讀書法下」一一・196）

（記錄者）吳雉　字は和中。建寧府建陽縣の人。『師事年攷續』三一七。

44　玩索、窮究、不可一廢。升卿。

深く味わうこと、とことん窮めることは、どちらもおろそかにできない。黃升卿

（校勘）朝鮮古寫本　窮究→考究

（注）前出27條と同じく、義理と本源を融合させ深く會得するための「玩索」「涵泳」と、道理を追究する「窮究」「究索」が讀書の上での兩輪であることを述べる。

45　或問讀書未知統要。曰、統要如何便會知得。近來學者、有一種則舍去册子、却欲於一言半句上便要見道理、又有一種、則一向汎濫不知歸着處、此皆非知學者。須要熟看熟思、久久之問、自然見箇道理四停八當、而所謂統要者自在其中矣。履孫。

ある人が讀書しても要諦がわからない、と尋ねた。それに答えていわれるには、「要諦なんておいそれとわかるわけがない。近頃の學生には、書物を捨て去って、片言隻句の中に道理を見つけたがる者がいるかと思えば、手當たり次第に讀み散らして、方向を見失ってしまう者があるが、どちらも學問を知っているとはいえない。じっくり讀んで深く思いをめぐらしさえすれば、いずれそのうちに、自然に道理がストンと腑に落ちるというもので、いわゆる要諦も自ずとその中にある」。潘履孫

（校勘）朝鮮古寫本　缺
朝鮮刊本　歸着→歸著　四停→四亭

（注）「統要」は他に用例を見出し難い語であるが、要諦の意味であることは明白である。

「一言半句」は「片言隻句」のこと。「周宰才質甚敏、只有

些粗疏、不肯去細密處求、說此便可見。載之簡牘、縱說得甚分明、那似當面議論、一言半句、便有通達處。所謂『共君一夜話、勝讀十年書』。若說到透徹處、何止十年之功也」（「訓門人五」一一七・2809）という用例が見える。

「汎濫」は、手當たり次第に廣く淺く書物をあさること。上篇62條に既出。

「歸着」は、文字どおり「落ちつき先、歸着點」を言う。「性只是理。氣質之性、亦只是這裏出。若不從這裏出、有甚歸着。」（「性理一　人物之性氣質之性」四・67）

「四停八當」の「停當」という語は、「渾然在中、恐是喜怒哀樂未發、此心至虛、都無偏倚、停停當當、恰在中間」（「中庸一　第一章」六二・1510）などからわかるとおり、妥當であることをいう一種の雙聲語で、それが「四～八～」に挾まれることにより、すべてが妥當なところに落ちつくという意味となる。

46　凡看文字、專看細密處、而遺却緩急之間者、固不可。專看緩急之間、而遺却細密者、亦不可。今日之看、所以爲他日之用。須思量所以看者何爲。非只是空就言語上理會得多而已也。譬如拭桌子、只拭中心、亦不可、但拭四弦、亦不可。須是切己用功、使將來自得之於心、則視言語誠如糟粕。然今不可便視爲糟粕也、但當自期向到彼田地爾。方子。

凡そ文章を讀むとき、細密なところばかりを讀んで、緩急の間に在るところをおろそかにするのはもちろんいけないが、逆に緩急の間に在るところばかりを讀んで、細密なところをおろそかにするのもまたよろしくない。今讀書するのは、いつかそれを役立てるためである。讀むのは何のためかをよく考えるべきであって、ただことばの上で取り組むだけではいけない。机を拭く時に、眞ん中を拭くだけではいけないし、へりを拭くだけでもまたいけないようなものだ。ともかくおのれに引きつけて努力し、それを自らの心に會得させてしまえば、ことばはまったくしぼり粕同然に見えてくるものだ。しかし、今の段階でことばをすぐさましぼり粕と見てはいけない。ただその境地に到るのを期すべきだ。李方子

（校勘）朝鮮古活字本　桌子→卓子
朝鮮古寫本　讀書法上所收　細密處→細密者
明刊本　緩急之間者→緩急之間　固不可→不固不可

（注）「細密」は、前條45條の「一言半句」の例として擧げた「訓門人五」（一一七・2809）にも見えるように、「粗疏」に對立する概念。また、「總論爲學之方」（八・144）では、「愈細密、

愈廣大」や「開闊中又着細密、寛緩中又着謹嚴」といった言が記錄される。

「緩急之間」は、本條では「細密」の對立語として用いられているが、「讀書法下」（一一・192）には同じ李方子の記錄によって、「看注解時、不可遺了緊要字。蓋解中有極散緩者、有緩急之間者、有極緊要者。某下一字時、直是稱輕等重、方敢寫出」という例があり、そこでは「散緩」と「緊要」の中間的なものとして用いられる。本條ではそのような三項對立の用法を重視し、「緩急之間」を、一見して重要でも散漫でもない、曖昧な中間的な部分を指すものと考えた。

「四弦」は、中心に對して緣・周邊を意味する。「糟粕」は、『莊子』天道篇の、「然則君之所讀者、古人之糟粕已矣」の意を踏まえると考えられるが、讀書自體をしぼり粕と見なす道家的な考え方とは異なり、朱子はまず道理を讀書により吸收せねばしぼり粕とはならないと考える。

「田地」は、場所、境地の意。

『朱子讀書法』一「熟讀精思」には、次のように見える。

「看文字、專看細密、而遺却緩急之間、固不可。專看緩急之間、而遺却細密、亦不可。須是切己用工、將來自得之於心、則視言語誠如糟粕矣。然今不可便視爲糟粕也。但當自期向到彼田地耳。」また、これにつづく次の條は、そのまま「桌子」の比喩に相當する內容になっている。「看文字、專看四邊而遺却緊要處。固不可。專看緊要而遺却四邊、亦不可。」

47　學者有所聞、須便行、始得。若得一書、須便讀便思便行、豈可又安排停待而後下手。且如得一片紙、便來一片紙上道理行之、可也。履孫。

學ぶ者は、道を聞いて悟れば、すぐに實踐に移すようであってこそよい。書物一部を得れば、すぐに讀み、すぐに考え、すぐに實踐すべきで、あれこれ段取りを整え時機を待ってそれから着手するのではいかん。たとえ一枚の紙でも、その一枚の紙に書かれた道理をすぐに實踐するのがよいのだ。潘履孫

（校勘）朝鮮古活字本　便來一片紙→便求一片紙
朝鮮古寫本　讀書法上所收　便來一片紙→便求一片紙

（注）「所聞」の目的語は、『論語』里仁篇の「朝聞道、夕死可矣」、また、同じく先進篇の「冉有問、聞斯行諸。子曰、聞斯行之」を參照し、特に後者については「聞」と「行」が緊密に結びつくことを述べる點で本條の踏まえるところと考え、「道理」と判斷した。

「安排」は、上篇第48條の注を參照のこと。

「下手」は着手すること。「停待」は「等待」に同じ。躊躇してすぐにとりかからない事を戒める例としては、「今人做工夫、不肯便下手、皆是要等待。如今日早間有事、午間無事、則

午間便可下手、午間有事、晩間便可下手、却須要待明日」（「總論爲學之方」八・135）などがある。

48　讀書便是做事。凡做事、有是有非、有得有失。善處事者、不過稱量其輕重耳。讀書而講究其義理、判別其是非、臨事卽此理。可學。

讀書とはつまり何かを行なうことである。およそ事を行なうには、是と非、得と失があるものだ。うまく事に處する人は、その事の輕重をはかるだけなのだ。書物を讀んで義理を究め、その是非を判別する。事に臨んではこの道理に徹するべきだ。鄭可學

（校勘）朝鮮古寫本　讀書法上所收　凡做事→凡故事

（注）「稱量輕重」は、比べ推し量ること。「伊川以權只是經、蓋每日事事物物上稱量、箇輕重處置、此權也、權而不離乎經也」（「論語十九　子罕篇下」三七・994）など。また、前出46條の「緩急之間」の注で擧げた「讀書法下」（一一・192）の例にある「稱輕等重」も同じ意味である。

「講究」は、上篇第65條に既出。

49　眞理會得底、便道眞理會得。眞理會不得底、便道眞理會不得。眞理會得底固不可忘、眞理會不得底、須看那處有礙。須記那緊要處、常勿忘。所謂「智者利仁」、方其求時、心固在此、不求時、心亦在此。淳。

ほんとうにわかったものは、ほんとうにわかったというがよい。ほんとうにわからなかったものは、ほんとうにわからなかったというがよい。ほんとうにわかったものは、忘れようがない。ほんとうにわからなかったものも、どこに障害があるかを見極め、どこが肝心なのかをしっかり憶えて、常に忘れないようにしなくてはならん。「智者は仁を利る」というように、求めている時は、心はそこにあるものだが、求めていない時にも、心がそこにあるようにせよ。陳淳

（校勘）朝鮮古寫本　「眞理會得底固不可忘、眞理會不得底」を缺く。

（注）「智者利仁」は、『論語』里仁篇の「子曰、不仁者不可以久處約、不可以長樂、仁者安仁、知者利仁」にもとづく。集注は「利、猶貪也」と注する。

50　學得此事了、不可自以爲了、恐怠意生。如讀得此書、須終身記之。壽昌。

學んでこの事を會得したとしても、自分でそれでよしと

思ってはいけない。そうすれば、怠け心が生まれるだろう。この書物を讀んで理解できたなら、終身それを憶えておくべきである。董壽昌

（校勘）朝鮮古寫本　缺

51　讀書推類反求、固不害爲切己、但却又添了一重事。不若且依文看、逐處各自見箇道理。久之自然貫通、不須如此費力也。

讀書する際、いちいち類推して振り返るのは、もちろん「自分のために切實なもの」とならないではないが、餘計な手間がかかる。まずは文章に沿って讀みながら、要所要所でそれぞれ自然と道理が見えてくるのがよい。しばらくすれば、おのずとすっきりわかるのだから、いらぬ勞力を費やす必要はない。（記錄者名を缺く）

（校勘）朝鮮古寫本　缺

（注）「費力」は勞力を費やすこと。「若只管去摸索、費盡心力、只是摸索不見。若見得大底道理分明、有病痛處、也自會變移不自知、不消得費力。」（「總論爲學之方」八・131）

「一重事」の「重」は量詞で「層」に同じ。上篇第80條の「須是今日去了一重、又見得一重、明日又去了一重、又見得一重。去盡皮、方見肉、去盡肉、方見骨、去盡骨、方見髓、使粗心大氣不得」が參考になる。

52　學者理會文義、只是要先理會難底、遂至於易者亦不能曉。學記曰「善問者如攻堅木、先其易者、後其節目」。所謂「攻瑕、則堅者瑕。攻堅、則瑕者堅」、不知道理好處又却多在平易處。璘

學ぶ者は、文義を理解しようとする際に、もっぱら難しいところから理解しようとするので、易しいところまでわからなくなる。『學記』には、「問い上手は、堅い木を加工するようにするものだ。しやすいところを先にし、節目のところは後にする」とある。つまり「瑕（もの）いところを削れば、堅いものももろくなり、堅いところを削れば、もろいものも堅くなる」というわけだ。（いまの學ぶ者は）すばらしい道理が實はしばしば文義の易しいところにある、ということがわかっていないのだ。滕璘

（校勘）朝鮮古寫本　缺

（注）『學記』の引用は、「善問者如攻堅木、先其易者、後其節目」（『禮記』學記）を指す。「禮四　小戴禮」（八七・2251～

2）に「『善問者如攻堅木、先其易者』、而後其難。今人多以難中有道理、而不知通其易、則難自通、此不可不曉」など、『學記』のこの箇所についての議論が見えるが、そのどれもが道理を講究する際の心構えに關連づけての發言である。

また、「攻瑕」以下は、『管子』制分篇「故用兵者、……攻堅則瑕者堅、乘瑕則堅者瑕」にもとづく。

讀書は易しいところから着手すべきことは、『朱子讀書法』一「循序漸進」でもしきりに說かれる。「今人讀書、且從易解處去讀。如大學・中庸・論・孟四書、道理粲然、人只是不去看。若理會得此四書、何書不可讀、何理不可究、何事不可處也。」「看文字、且要看其平易正當處、孔子教人、句句是下實頭。」「看文字、且先看明白易曉者。」

53 只看自家底。不是自家底、枉了思量。燾

ともかく自分のこととして讀むのだ。自分のことでなければ、思案がむだになってしまう。呂燾

（校勘）朝鮮古寫本　缺

（注）「枉」は「無駄にする」の意。下篇15條及び27條を參照。

54 凡讀書、且須從一條正路直去。四面雖有可觀、不妨一看、然非是緊要。方子。

讀書は、とにかく一本の正道をまっすぐ進むことだ。周圍に目を引くことがあっても、ちょっと眺めるぐらいはともかく、それは肝心なことではない。李方子

（注）本條と同趣旨の主張は、「學七　力行」（一三・223）にも「學者如行路一般、要去此處、只直去此處、更不可去路上左過右過、相將一齊到不得」と見える。

55 看書不由直路、只管枝蔓、便於本意不親切。淳。

書物を讀むのに正道によらず、枝葉のことばかりにかかずらわっていれば、本筋がしっくりこなくなってしまう。陳淳

（注）この條は『朱子讀書法』四「虛心涵泳」にも見える。「枝蔓」は、本質以外の餘計な枝葉の部分をいう。上篇49條の「生枝節」についての注に擧げた「枝蔓」の用例は、本條の內容にも關連するので參照されたい。

56 看文字不可相妨、須各自逐一著地頭看他指意。若牽窒著、則件件相礙矣。端蒙。

文章を讀むのには、他に引っ張られてはいけない。必ず一つづつ着實にその內容を讀んでいくのだ。引きずられてしまえば、一つ一つが理解の妨げとなる。程端蒙

（校勘）朝鮮古寫本　缺

（注）「著地頭」は、「着實に、足を地に付けて」といった意味、「聖人於小處也區處得恁地盡、便是一以貫之處。聖人做事著地頭」（「論語十三　雍也篇二」三一・779）など。

「牽窒」は、「引きずる」の意。

（記錄者）程端蒙（一一四三―一一九一）　字は正思。鄱陽縣の人。『師事年攷續』二九六。

57　看文字、且逐條看。各是一事、不相牽合。

文章を讀むには、とにかく條ごとに讀むこと。それぞれ別ものであり、互いに勝手に結びつけないこと。（記錄者名を缺く）

（校勘）朝鮮古寫本　缺

58　讀書要周遍平正。夔孫。

讀書は、行き屆いて公正でなくてはならない。林夔孫

（注）「周遍」（周徧も同じ）は、周到であることをいう。「天地間只是這箇道理流行周徧」（「論知行」九・156）など。

59　看文字不可落於偏僻、須是周匝。看得四通八達、無些窒礙、方有進益。又云、某解語孟、訓詁皆存。學者觀書、不可只看緊要處、閑慢處要都周匝。今說「求放心」、未問其他、只此便是「博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣」。「博學而篤志、切問而近思」、方是讀書、却說「仁在其中」、蓋此便是「求放心」也。人傑。

文章を讀むには、偏りがあってはならず、廣く全體を見なくてはいけない。全體を見通して、何の滯るところもないようにしてこそ進歩する。またいわれた、「私の『論語』・『孟子』の注解には、訓詁はみな備わっている。學ぶ者が書物を讀むときには、肝心なところばかりではなく、何でもないところも全て廣く讀まねばならない。いま、（『孟子』が）『その放心を求む』だけを言って、他のことを問題にしないのは、それこそが、『博く學び篤く志し、切に問うて近く思う、仁は其の中に在り』ということであり、『博く學び篤く志し、切に問うて近く思』ってこそ讀書なのだが、（『論語』では）『仁は其の中に在り』というのは、それがつまり『放心を求める』ことだからなのだ。」萬人傑

（校勘）朝鮮古活字本　礙→碍　其他→其它　切問而近思→切問近思

朝鮮古寫本　缺

（注）「偏僻」は、かたよっていることをいう語で、「問、大學、譬音改僻、如何。曰、只緣人心有此偏僻。」（「大學三　傳八章釋終身齊家」一六・351）の用例が見える。

「周匝」は「偏僻」の反對語で、隅々まで行きわたっていることをいう。「地却是有空闕處。天却四方上下都周匝無空闕、逼塞滿皆是天」（「理氣上　大極天地上」一・6）など。

「閑慢處」は、どうでもいいような所というような意味であるが、「緊要處」と對比的に述べられているので、本條の趣旨としては、さして重要にも見えぬ箇所ということになる。同樣の用例としては、「訓門人五」（一一七・2830）の、「緊要便讀、閑慢底便不讀。精底便理會、粗底便不理會」が擧げられる。このような、重要なものと必ずしも重要とは見えぬものとの對比は、前出46條に既出。

「四通八達」は、全面的に通曉していること。「然聖賢之言活、當各隨其所指而言、則四通八達矣。」（「中庸三　第二五章」六四・1581）

「窒礙」は、流れが滯ることをいう。「滯礙」も同じ「近方見得、讀書只是且恁地虛心就上面熟讀、久之自有所得、亦自有疑處。蓋熟讀後、自有窒礙不通處」（「讀書法下」一一・186）や、「如禮樂射御書數、一件事理會不得、此心便覺滯礙。惟是一一去理會、這道理脉略方始一一流通、無那箇滯礙」（「論語十六　述而」三四・866）など。

「說求放心、未問其他」は『孟子』告子篇上の「學問之道無他、求其放心而已矣」を踏まえた言い方で、「博學而篤志～」は『論語』子張篇の語である。それぞれ下篇10條の注及び下篇15條の注を參照されたい。これは、『孟子』の側から『論語』に近づき、また一方で『論語』によって『孟子』を理解しようとしている箇所として興味深い。

本條の冒頭から「方有進益」までとほぼ同じ文が『朱子讀書法』卷一「熟讀精思」に見える。

60　看文字、且依本句、不要添字。那裏元有縫罅、如合子相似、自家只去抉開。不是渾淪底物、硬去鑿。亦不可先立說、牽古人意來湊。且如「逆詐、億不信」與「先覺」之辨。「逆詐」、是邦人不曾詐我、先去揣摩道、那人必是詐我、「億不信」、是那人未有不信底意、便道那人必是不信。「先覺」、則分明見得那人已詐我、不信我。如高祖知人善任使、亦足分明見其才耳。〔淳〕

文章を讀むときには、まずは本文通りに讀んで、餘計な文字をつけ加えないことだ。そこにはもともと隙間があるもので、合わせ箱のように、こちらから開けてやりさえすればよい。混沌としたものに無理やり目鼻を鑿つわけでは

ない。また、先に說を立てておいて、古人の考えを無理にはめ込んでいくのではいけない。例えば、(『論語』にいう)「詐りを逆え、不信を億んばかる」ことと「先ず覺る」ことの違いはというと、「詐りを逆え」るのは、人が自分を騙してもいないのに、先回りして「あいつはきっと騙す」と憶測することだし、「不信を億んばかる」のは、人が嘘をつくつもりのないうちから、「きっと嘘をつく」と思いこむことである。「先ず覺る」というのは、人が自分を騙し、嘘を言っているのをはっきり見拔くことである。例えば、漢の高祖が人材を見極めて巧みに人を使ったのは、その才能をはっきり見拔いていたからなのだ。〔陳淳〕

(校勘)　朝鮮古活字本　硬去鑿→便去鑿　筆錄者なし→淳
朝鮮古寫本　必是不信→必是不信我　高祖→○○　筆錄者なし→淳

(注)　「合子」は「合わせ箱」のこと。「據曆家說有五道、而今且將黃赤道說、赤道正在天之中、如合子縫模樣、黃道是在那赤道之間」(「理氣下　天地下」二・12)など。また、このような、合わせ箱と隙間に類似した比喩は、上篇の13條から15條にかけて見える。

「逆詐」以下の語は、『論語』憲問篇の「不逆詐、不億不信、抑亦先覺者、是賢乎」にもとづく。

「渾淪」は上篇15條に既出、注を參照されたい。本來この語は「渾沌」と非常に近い意味を有する疊韻語であるが、本條では「鑿つ」という行爲と一組で用いられており、『莊子』應帝王に見える日毎に七竅を鑿たれて死んだ「渾沌」の寓話をより顯著に思い起こさせる例である。

漢高祖が人を任用する力があったという記事としては、「此三者〔張良・蕭何・韓信〕、皆人傑也。吾能用之」(『史記』高祖本紀)などが擧げられる。

なお、底本では記錄者名を缺くが、朝鮮古寫本・古活字本・刊本に從い陳淳とした。

61　讀書若有所見、未必便是、不可便執着。且放在一邊、益更讀書、以來新見。若執着一見、則此心便被此見遮蔽了。譬如一片淨潔田地、若上面纔安一物、便須有遮蔽了處。聖人七通八達、事事說到極致處。學者須是多讀書、使互相發明、事事窮到極致處。所謂「本諸身、徵諸庶民、考諸三王而不繆、建諸天地而不悖、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人而不惑」。直到這箇田地、方是。語云、「執德不弘」。易云、「寬以居之」。聖人多說箇廣大寬洪之意、學者要須體之。廣。

讀書して何か覺るところがあっても、それはまだ正しいとは限らず、こだわってはいけない。しばらくそれは傍らに置いて、さらに讀書を重ね、新しい考えを得るようにするのだ。もしも一つの考えにこだわれば、この心はそれに覆われてしまう。例えば、まっさらな土地の上に何か物を置けば、覆われた場所ができてしまう。聖人は全體にくまなく通達し、一つ一つのことがらをその極致まで述べている。學ぶ者は、多くの書物を讀んで、道理が互いに明らかになるようにし、一つ一つのことがらを極致まで窮めることだ。いわゆる、「これを身に本づけ、これを庶民に徵らかにし、これを三王に考みて繆らず、これを天地に建てて悖らず、これを鬼神に質して疑いなければ、百世以て聖人を俟てども惑わず」である。ここまで至ってこそよいのだ。『論語』には、「德を執ること弘からず」といい、『易』には、「寛やかにし以てこれに居る」という。聖人は、この廣く伸びやかな心をさかんに述べているのだから、學ぶ者は、それをしっかり體得せねばならない。輔廣

（校勘）朝鮮古活字本　不惑→不感

朱子語類讀書法篇譯注（四）（興膳・木津・齋藤）

朝鮮古寫本　這箇→這个　不弘→不洪　說箇→說个
朝鮮刊本　執着→執著　寛洪→寛弘

（注）「以來新見」は、前出32條にも見えた横渠の「濯去舊聞、以來新意」に基づく。

「七通八達」は、前出59條の「四通八達」と同意語と考えてよいであろう。

「所謂」以下の引用は『中庸』による。當該箇所である「中庸三　第二九章」（六四・1593）のみならず、朱子は、「所謂建諸天地而不悖、質諸鬼神而無疑、百世以俟聖人而不惑。何憂之有」（「論語一九　子罕篇下」三七・983）や「考諸三王而不謬、百世以俟聖人而不惑、猶釋子所謂以過去未來言也」（中庸三第二七章」六四・1591）など隨所でこの語を引いている。

『論語』の引用は、子張篇の「子張曰、執德不弘、信道不篤、焉能爲有、焉能爲亡」に基づき、『易』は、乾卦の文言「寛以居之」の語である。

譯注者後記　本稿作成の過程で、濱田麻矢、福田知可志、多田伊織、夏嵐、副島一郎の諸君による譯注の草稿を參照した。謝意を表する。